

上げた仕事だ、それを久保田が後生大事に守ってチヨイ／＼と姑息の改良をして居るのは、氣毒といへばマアソナものだ

△併し國粹保存といふやうなことは、得て俗に入り易いものだから、岡倉の方からいへば是れが一時美術界に幅を利かせた大原因となつたかも知れぬ、岡倉はマア彼れで宜いとして其後を繼ぐものは、何とか一工夫しなければ成らぬ筈だ

(明治三十二年八月七日『時事新報』)

「浜尾新一喝」云々の真偽は定めがたいが、本校に隠然たる力を及ぼしていた浜尾であつてみれば、そうしたこともあつたかも知れず、それが改革に歯止めをかけたであらうことは十分考えられる。ただし、大正五年に国民美術協会が提出した本校改革案(岩村透、黒田清輝らの主張を代弁していると考えられる。)にこの工芸分離問題が盛り込まれているところを見ると、黒田はこの考えをのちのちまで持ち続けていたようである。

⑥ 生徒成績品展覧會

恒例の生徒成績品展覧會が明治三十二年四月十三日から四月十九日まで本校新館において開催され、各科生徒の作品と参考作品(教官の作品と明治二十九年以降の卒業制作中の優等のもの)が展示された。総入場者数は一万二二三〇人であつた。四月十三日の賞状授与式の模様と受賞者を『校友会雑誌』第一号(同年十一月発行)は次のように伝えている。

生徒成績品展覧會賞状授與式景況

明治三十二年四月十三日午前八時職員生徒式場に整列し一統敬禮の後久保田校長心得は日本繪畫科生徒始め各科優等者に賞状を授與せられ左の式辭を朗讀せらる

式辭

生徒諸子が切磋勲勉ノ成績品ヲ陳列シテ諸子ガ常ニ愛養ト監督トヲ受クル所ノ父兄保證人及ビ他日諸子ガ社會ニ出デ、共ニ藝苑ニ馳驅スル所ノ斯道ノ有志諸人ニ示スコトハ諸子ガ修養ノ實際ヲ知ラシメ諸子ガ藝術ノ信用ヲ得ルニ於テ最モ効果アル所ノ方法トス 余ハ諸子ノ爲メニ此公會ヲ開クヲ喜ブト共ニ職員諸君及ビ生徒諸子ガ此好成绩ヲ出シ且會事ニ盡力シタル勞ヲ謝ス

茲ニ獎勵ノ主意ニ基キ各出品ニ就テ審査ヲ行ヒ慎重ナル詮衡會議ヲ經テ優劣ヲ評定シ今日開會ノ初ニ當リテ賞状ヲ授ケ以テ技術ノ優等ヲ表ス 授賞者諸子之ニ安ゼスシテ益々奮勵アランコトヲ望ム

明治三十二年四月十三日

東京美術學校長心得 久保田 鼎

右朗讀するや受賞者總代河邊正夫氏左の答辭を讀む

答辭

本校生徒成績品展覧會開會セラレ茲ニ賞状授與ノ典ヲ擧ゲラレ生等拙劣ノ技ヲ以テシテ賞撰ニ與ルコトヲ得タリ 何ノ光榮カコレニ如カン 請フ益研鑽ノ功ヲ積ミ以テ此名譽ニ乖カザラントス

明治三十二年四月十三日

東京美術學校生徒成績品展覽會受賞者總代

圖按科第四年生 河邊 正夫

かくて一統敬禮校長以下順次退場し式全く結了せり 本日賞狀を授與せられたる品目及び姓名は左の如し

各科授賞者姓名表

豫備科

一等賞

鯛 臨畫

雁 同

二等賞

雁 臨畫

鶴 同

木瓜 寫生

同 同

同 同

拾得 臨畫

三等賞

雁 臨畫

鍾馗 同

日本畫科

一等賞

○秋山暮雲

○月夜人物

○樓閣山水

○曉色

○秋野鹿

○松に虎

○熊谷父子一ノ谷魁

○櫻花美人

○草廬三顧

○太眞王夫人

○櫻花美人

○虫之音

○農家少女

○紫式部 屏風

二等賞

秋野

山水

小兒遊

春色

溪流

牧牛

山水

櫻に鷹

弦調

松に鷹

松に猿

哀別

建部 政治

中原佐次郎

前波覺次郎

渡邊吉太郎

植松 雅行

野口 駿尾

綾見 外也

田中忠三郎

足立 啓

大智 恒一

後藤 浪吉

森田豐次郎

鶴田幾太郎

小倉善三郎

同

移川 三郎

筆谷儀三郎

建部 政治

宮脇平太郎

磐瀬 純

田中重次郎

杉浦 朝民

村崎 政昶

八島合戰
山水
鯉
雪景山水
涼月
梅實小禽
哀別
月夜山水
虎
老小町
山水
牡丹
三等賞
山水
楊柳美人
山水
虎
撰虫 屏風
雛祭
楊柳美人
京美人
櫻二雄 屏風
松二鷹
櫻二鳩
爭猫

野口 駿尾
關 欽哉
村崎 政昶
志水 清
横山新太郎
岡村 吉樹
大石新太郎
中島 次郎
大石新太郎
管^{〔管〕}季吉
横山新太郎
山岡 盛
堀内 喜一
工藤 晨
同
小倉善三郎
土佐 光一
野口 駿尾
杉野松^{〔天〕}次郎
盤瀬 純
有馬 龍秀
今井 重信
村上金次郎
丹波 二郎

西洋畫科油繪第一教室

一等賞

武者
山水
山水
山水
紫式部
秋雨山水
山水
山水
山水
圖畫講習科
藤二鮎
武藏野

堀 大助
金井 忠三
河村^{〔川〕} 孝
横山新太郎
鈴木 久治
大智 恒一
岡村 吉樹
大智 恒一
志水 清
長澤 政宜
同
大内 鐵也
赤松 麟作
廣瀬 勝平
同
椎塚 修房
窪田 喜作
柴崎 恒信
矢崎千代次
中澤 弘光
小西正太郎

二等賞

同
西 伊三次
井上雄太郎

赤松 麟作

田中 寅三

大内 鐵也

柴崎 恒信

磯野 吉雄

中澤 弘光

江間 良吉

磯野 吉雄

原田竹二郎

矢崎千代次

喜多村悦三

岡 吉枝

山本森之助

田中 寅三

山本森之助

窪田 喜作

中丸精十郎

根津 文吉

城 勉一郎

西洋畫科木炭畫教室

一等賞

八條 彌吉
金澤悌次郎

鹽 見 競

大東 昌可

時任 彫熊

池上甚三郎

加藤 二郎

森 半 平

種子島賢助

吉澤 春海

宇和川通諭

松原 康雄

澤野 胖藏

山田 榮吉

内野 猛

佐藤 均

大八木一郎

戸田 謙二

岡野 榮

岡 四郎

三等賞

二等賞

三等賞

西洋畫科油繪第二教室

一等賞

小笠原 丁

笠翁式小棚

小檜山右近
千頭 庸哉

石田 常福

同

伊藤啓次郎
江島五三郎

佐藤 醇吉

同

竹本 曜二

海老名明四

同

中西 乾

大倉 正愛

元祿模様單物

奧山 保

二等賞

二等賞

山田 全次

天平花朽木形女兒帶

奧山 保

荻生田文太郎

藤原式机

同

西山 千克

貝合服紗

佐藤健四郎

庄野宗之助

蒔繪文臺

江島五三郎

玉置 照信

三等賞

伊藤啓次郎

庄野宗之助

蒔繪文臺

竹本 曜二

倉田 重吉

同

吉田乙三郎

大槻 才吉

鼠釘隠

同

森田 洪

鳥の欄間

同

三等賞

菊車女帶

佐藤健四郎

石田 益敏

松喰鶴服紗

同

壁紙

森田 洪

寫眞挾

奧山 保

烟草盆

佐藤健四郎

ナフキリング

吉田乙三郎

圖按科第一教室
一等賞
蒔繪文臺

同

同

小檜山右近
千頭 庸哉
中西 乾

圖按科第二教室

一等賞
俱樂部建築

二等賞

市中建築

同

同

ステインドグラス圖按

三等賞

市中建築

噴水器

乙種豫備課程

一等賞

○人首

二等賞

胸部

牛

三等賞

男子の腕

馬首

彫刻科木彫第一教室

一等賞

○慈恩大師

○馬

○くま鷹

河邊 正夫

河邊 正夫

吉田 衡

久保田誠次郎

大槻 才吉

松長長三郎

森田 洪

遠藤 忠雄

野村 隆雄

遠藤 忠雄

遠藤 忠雄

野村 隆雄

野村 隆雄

青木 外吉

山崎巳之助

水谷 鐵也

二等賞

野翁

支那人物額

同

蘇武

三等賞

元祿婦人

佛手

蘇武

彫刻科塑造第一教室

一等賞

○老人

○同

○人の顔

○兔

○猫

○同

○猪

二等賞

老人

人の顔

老人の顔

象の頭

本保義太郎

山本 筍一

高村光太郎

水谷 鐵也

本保義太郎

今戸 精司

細谷 三郎

石川 成錄

青木 外吉

本保義太郎

堀河 鼎

水谷 鐵也

高村光太郎

水谷 鐵也

高村光太郎

山崎巳之助

本保義太郎

堀川 鼎

本保義太郎

人の顔

青木 外吉

彫刻科塑造第二教室

虎

山崎巳之助

一等賞

猫

山本 筍一

少女半身

鶏

水谷 鐵也

男子全身

同

高村光太郎

男子半身

人の顔

足立 厚實

男子全身

三等賞

老人

島宗磨 瑳雄

男子全身

鶏

細谷 三郎

同

狎

山本 筍一

少女半身

猫

今戸 精司

二等賞

兎

柚木 房吉

女の半身

彫刻科木彫第二教室

一等賞

○旅僧

渡邊 長男

同

二等賞

雛僧

中村 直彦

少女半身

牧夫

渡邊 長男

同

小兒

武石弘三郎

男の全身

小兒と犬

山田 政治

女の半身

三等賞

少女

舟井登久太郎

少女半身

小兒

安田 久吉

彫金科

旅僧

佐藤 八百

一等賞

武石弘三郎

同

渡邊 長男

三橋 清

同

中村 直彦

同

渡邊 長男

中村 直彦

香田 麟橋

同

同

松橋 宗明

津田 信夫

山田 政治

松橋 宗明

政清徳三郎

○水仙圖短冊

○鐵柺短冊

二等賞

柳に鳥短冊

猪短冊

枯木に鳥短冊

月下梟短冊

三等賞

春曙短冊

瓢短冊

葡萄短冊

瀧短冊

芭蕉短冊

鍛金科

一等賞

○鐵茶釜

二等賞

○鐵靈芝菓子器

○鐵枯木に烏香爐

三等賞

銅雪月花壺

鑄金科

一等賞

○しやも

四谷 正美
瀧本友太郎

滑川 兼彦

海野銀三郎

市島市太郎

佐藤 磐

加納 秋三

齋藤 政三

伊澤 直吉

池田芳太郎

富山 休三

石田 英一

曾根 銳

遠井藤太郎

柚木 房吉

津田 信夫

○鍛冶師

二等賞

しやも

三等賞

びすまるく像

柘榴に皿

猿

犬

椿

漆工科

○志のぶ草蒔繪菓子皿

○牡丹蒔繪菓子盆

○源氏繪合蒔繪方盆

二等賞

炭籠に鼠蒔繪名刺盆

亂菊蒔繪名刺盆

貝づくし蒔繪名刺盆

以上

備考 右目錄中○符の有るは閉會後宮内省に差出 畏

くも 天覽の榮を得たるものなり

右展覽會閉會の後作品中優等のものを選擧し相當の裝飾を加へ宮中へ差出し畏くも

天覽の榮を拜せしは我校の名譽は勿論製作者の幸榮實に大なるべし 今其の姓名は前目錄中に符合を加へ尙御用品として撰ばれた

新免教太郎

新井 豊

桑原 陶

大坂七太郎

桑原 陶

伊藤 龍吉

松原 友丸

小岩 峻

藤岡 金吾

田澤 伸

前川 佐一

土井藤四郎

三村 耕三

るものの姓名を左に記さむ

日本畫科	秋野雙鹿	第二年生	中原佐太郎
同	波に千鳥	同卒業生	山本 昌
同	海邊雙鶴	同	豊岡保太郎
同	嵐 山	同	木村 俊秀
同	仁德帝御歌之意	教授	川端 玉章
同	枇杷に孔雀	教授	荒木 寛敏
彫刻科	馬	第二年生	山崎巳之助
鍛金科	靈芝菓子器	第三年生	曾根 鋭
同	蓮花香爐	同	遠井藤太郎
漆工科	秋草香爐	卒業生	石河壽衛彦
同	衣食住卷葉入	助教授	金井 清吉

以上

本校に於て開會の展覽會に於て我校友會は無慮無限の名譽を得たるは當會の幸福と云ふへし 職員諸君の確實慎重なる審査によりて名譽ある賞状を授與せられたる諸氏は即ち我校友會の會員なれば當會は諸氏の辛榮を祝し同時に尙其奮發勉勵を希望するの旨趣を以て等級に對し賞牌を鑄造しこれを受賞諸氏に授與することとせり

右の目錄中、西洋画科の分だけは作品の題名が記されていないが、同月十八日付『国民新聞』は「洋畫科は木炭病油畫等實物寫生の裸體畫多く」と報じている。また、同日付『毎日新聞』はこの展覽會を次のように評している。

○藝苑の榮

東京美術學校例に依りて各科生徒成績品の展覽會を開く 樓下左方の室即ち彫刻科より始む 此にて一と際觀の更まりしは西洋彫塑の技新入の結果として多の石膏又は粘土の塑造品を陳ねし事及び木彫科が多少解剖に注意するが如き痕の見ゆることは是なり 進みて日本畫科に入る 雅邦去りて寛敞入りし後は忘るゝまでに音もなく臭もなき日本畫の成績如何と通覽するに種々様々の畫風ありて中には雅邦の名残りも見へ皮想的和洋折衷も交り技術上の寛敞翁は未だ何等の勢力を形らざるが如く若し翁にして得意の孔雀と鶴及び其所謂運動の妙を見せし積りなるべき鐘馗の出品なかりせば誰か此大家の此校に與れるを知るものぞ 樓上に到れば圖案科あり西洋畫科あり木炭畫あり油繪に入る 競技と題して同一モデルの畫五六を掲げし處彼此比較の興味あり 日本畫科に比して全體の整へるは強ち記者の一家言にあらざるべし 切に後者當局者の注意を希ふ 斯くて階下の右方に出づれば美術工藝科の一室あり 此等各室とも卒業製作を併せ出品せり

出陳された参考作品については正確な記録がなく、前出『国民新聞』の記事の末尾に次の記載があるのみである。

〔上略〕参考品中日本畫科に於ける卒業生鷹田其石氏筆（春雨）（霜）同水草流水〔神來〕氏筆（深山隻鹿）洋畫科に於ける卒業生和田英作氏筆（夕暮）同岡田三郎助氏筆（愕）同白織幾之助氏筆（稽古所）同湯淺一郎氏筆（濱の黄昏）等は屈指の作なり

日本畫科荒木教授筆（孔雀）同川端教授筆（水墨山水）前者は頗る俗氣を帯び人をして倦厭の情を起さしめ後者は稍々觀るに足ると雖ども教授の筆としては未だし彫刻科竹内教授の（後）技藝大不感服の作となす 今回の列品例年に比し概して活氣を欠き甚だ見劣りするの感あり こはさきに同校教授の更送ありしがその一大原因となりしものなるべけれども今にして大に奮起する所なくんば同校の前途頗る杞憂に堪へざるものあるを覺ゆるなり（影法師〔正宗白鳥〕）

⑦ パリ万国博覽会に向けて

明治三十二年八月二十一日、本校の川端玉章、高村光雲、黒田清輝、長沼守敬、浅井忠、石川光明、久米桂一郎、合田清、大村西崖ら教官は臨時博覽会鑑査官を命ぜられた。翌三十三年にパリで開催された万国博覽会への出品物の鑑査のためであった。

この博覽会を機に本校では久米桂一郎、黒田清輝、岩村透、合田清、海野美盛らが渡仏し、また、浅井忠もこの時期にパリへ留学する。多くは翌三十三年春に出発しているが、三十二年秋には久米の休職・渡仏、浅井忠のヨーロッパ留学が決定したため、特に西洋画科では渡仏の氣運が急速に高まった。左記の新聞記事はその氣運を伝えるものである。

○よみうり抄

◎東京美術學校教授送別會 東京美術學校教授久米桂一郎氏へ出品協會の用事を帯びて來月六日に同浅井忠氏へ歐洲留學を命ぜら

れて來年一月に同合田清、海野美盛氏へ自費を以て同一月に巴里へ赴くに付川端玉章、高村光雲、黒田清輝、長沼守敬、大村西崖の五氏發起となり本日上野精養軒に盛なる送別會を開く筈◎新海海野両氏 新海竹太郎氏も海野氏同道自費にて佛國へ赴くに付東京彫工會へ二氏に巴里博覽會出品者總代の任務を囑托したり◎教授不在中の美術學校 久米氏請持の西洋考古學へ大村西崖氏引繼ぎ、同木炭畫教室へ黒田清輝氏監督し、浅井氏の風俗寫生室も黒田氏が預りしに付小林萬吾氏西洋畫教室助手を命ぜられて之を補助し、合田氏の佛語ハ其實兄たる田島陸軍大佐之を引請けたり（田島忠親）但し海野氏受持の分ハ海野勝珉、平田宗幸氏あれバ別に補員せず〔實際の渡航時期はこの記事と同一ではない。―編者註〕

（明治三十二年十一月二十七日『読売新聞』）

久米桂一郎は明治三十二年十一月五日に休職。以後復職までの事歴は本學所藏の久米の履歷書に次のように記されている。

〔明治三十二年〕十一月廿四日 美術上研究ノ爲本年十二月ヨリ

凡向一ヶ年間佛國へ私費渡航ノ件文部大臣へ願濟

十二月二日出發ス

明治卅二年十一月廿四日 佛國滯在中美術教育取調ヲ囑託ス 文

部省

十二月十七日〔註〕臨時博覽會鑑査官被免 内閣

同三十三年 佛國巴里萬國博覽會ニ油畫ヲ出品シ賞狀ヲ受ク

同卅四年三月 日ヨリ伊太利國ミラン、チュラン、ピサ、羅馬、